飯綱町コミュニティスクールだより

№２０　令和３年８月１日　飯綱町コミュニティスクール

学校運営協議会が目指すもの



貝ノ瀬滋　三鷹市教育長

令和３年５月７日町内小中学校職員が飯綱中学校に集まり合同職員会を行いました。その会議の中で、全国で進められているコミュニティスクールの先駆けとなって実践された貝ノ瀬滋三鷹市教育長より、上記標題でオンライン形式による講演が行われました。

【講演会配布資料から】

＜現代日本の地域社会が抱える課題＞

少子化、高齢化　→　地域コミュニティに関わる人々は地域の存続に危機感を持っている

子どもたちの未来

・子どもたちの６５％は、今は存在しない職業に就くことが予想される
・今後１０～２０年程度で約４７％の仕事が自動化される可能性が高い
・２０３０年までには週１５時間程度働けば済むようになることが予想される

予測困難な未来に生きる子どもたちの教育に求められること

・学校は進化、発展する社会が子どもたちに求める力を身に着けさせる
・学校で学んだことが社会でどうつながっていくかを理解させる
・多様な人々とのかかわりの中で様々な生き方を学ぶ
・地域にしっかりと根差したたくましい人材の育成

以上の内容を学校だけの教育力で克服することは難しい

学校の課題

地域では

・優れた技術や豊富な知識を生かしたい、伝えたい
・昔からの地域の伝統や技（わざ）を生かしたい、伝えたい
・地域の役に立ちたい、活動したい
・地域の人達とつながりたい

以上の内容について地域の中で生かす場所がない

地域の課題

飯綱中学校講堂に小中学校職員が参集



学校と地域の課題を克服するために三鷹市が行ったこと

＜三鷹市の事例＞

①学校教育は校門の中だけではなく　地域全体が学校教育のフィールド

②学校はサービス提供者、保護者は共に子どもを育てるパートナー　協働意識の醸成

③学校への支援は、一方通行ではない。学校・地域・それぞれの役割を果たすことで、それぞれが成長する　相互に恵みのある互恵関係

④地域、保護者が学校教育にそれぞれの立場から関わることで、子どもだけでなく大人も育つ、教えることは学ぶこと　生涯学習の推進

⑤学校は地域コミュニティの拠点　地域創生は学校から

＜三鷹市の学校運営協議会設置効果＞

○学校経営の透明性と継続性

学校運営協議会による学校経営方針の承認は、学校が社会に開かれた存在となり、保護者、地域の願いを教育に生かすための第一歩

○社会に開かれた教育課程の実施に効果

教育活動に地域人材、企業等の協力を得ながら、児童生徒に今学んでいることが社会とどのようにつながっていくかを学ばせる

○校内組織のみならず PTA 等保護者、地域の組織の見直しも進む

学校と関係する様々な組織が学校運営協議会を通じて、従来の関係性を見直し整理統合するなど、学校、保護者、地域それぞれの負担軽減につながる

○地域課題の解決を図る学校区単位の組織となる

学校運営協議会に教育委員会のみならず、地域の課題に応じた首長部局の職員が加わることで、教育の枠を超えた様々な地域の課題解決の組織となる

○児童生徒はボランティアという生き方を学ぶ

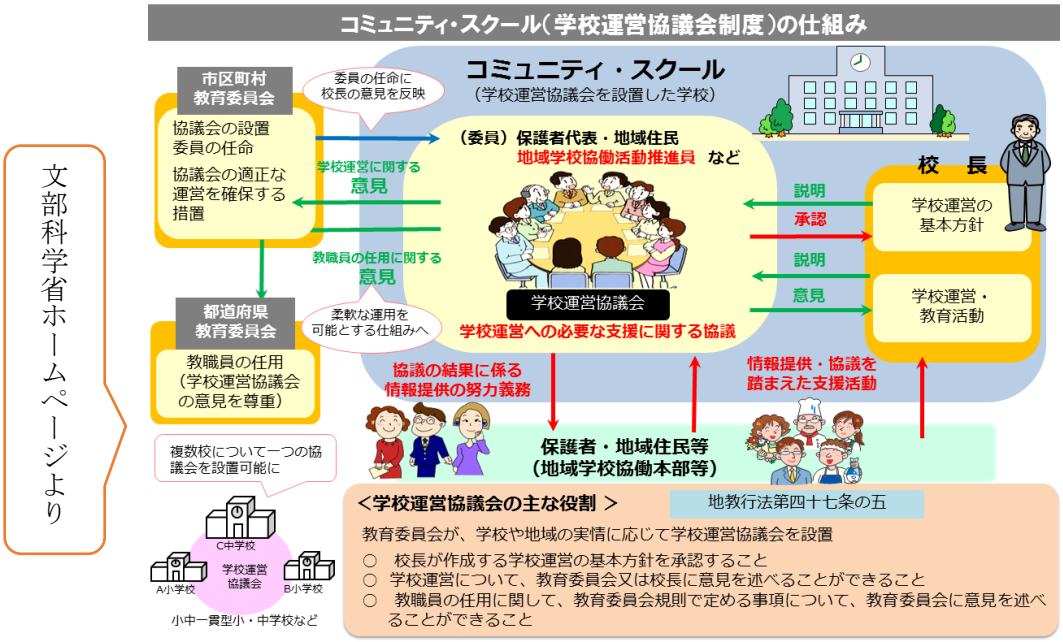
学校運営協議会に児童生徒を参加させることにより、子どもたちは自分たちのために汗をかく大人たちの姿から、自らの生き方としてのボランティア活動を学ぶ機会となる

○地域学校協働本部の校内常設により、不審者対策にもなる

学校内に地域の方々が常駐することにより、常に外部の目が行き届くことになり外部からの不審者等が校内への侵入を防ぐことになる→「学校は開いて守る」へ転換

学校を拠点に、人づくりとまちづくりの好循環を目指す
学校の存立基盤である持続可能な地域コミュニティづくり

学校を社会総がかりで子どもを育てる拠点とするため
コミュニティスクールの仕組みを導入



第二回学校運営協議会から

飯綱町の学校運営協議会は昨年度発足し、２年目を迎えている。

昨年度は、コロナ禍により協議会で話し合う時間も少ない中、年度末の最終会議においては、「運動不足を補う学習の工夫」「コロナ禍学習スタイル（マスク）や行事」「子どもとのあいさつ（心の交流）」「稲作体験学習」等が話題になった。

本年度もそれぞれの学校の全体計画が承認され、委員が学校の方針について共有した。

＜３校の主な話題＞

１．ICT 時代、会話によるコミュニケーション減少、家の中からでも声掛けを。
２．学校運営協議会委員から地域への発信。
３．生まれた土地に対する誇り（飯綱町の自然豊か）を持ちながら育つ子ども、サポートする大人。
４．学校、児童クラブ、家庭の子どもの様子。
５．世界をリードする日本人の育成。
６．iPad 導入により子どもの写真等思い出の電子データの持ち帰りと情報管理について。
７．体験活動は住民とのコミュニケーションの機会であり、将来の自立のための機会にも繋がる。
８．コロナ禍の生活スタイルの変化と受け止め。
９．子どもたちの自己肯定感を高める。
10．地域と学校が一体となった子どもの育成。
11．挨拶から広まる交流の輪。





足育・キャリア教育（６月１８日）



実際に足の大きさを計測してもらいました。

三水小学校では、学校保健委員会・家庭教育学級で保護者を対象にした「【足育】子どもの大切な足の問題。靴のはき方・選び方」の講演が開かれました。

講師は、フットウェアーバランスラボ靴工房クラデアルテ代表　柳澤剛司　先生です。（伊那市在住）午後には６年生に向けて靴職人についてキャリア教育として話がされました。

＜学校保健委員会・家庭教育学級＞



靴の選び方、靴の履き方について。

履く時に、つまさきをトントンすることがありますが、かかとをトントンする方がいいそうです。

＜６年生キャリア教育＞



ものづくりは、子どものころから好きだった。

靴を自分で作りたいと思っていた。人の役に立ちたいと足の不自由な人のための靴型装具に取り組んでいる。

いきいきサロン（７月６日）







７月のいきいきサロンは町内全域で同時に行われ飯綱中学校３年生との交流が行われました。

コロナ禍ということもあり、前回のように全校生徒ではありませんでしたが、中学生と住民の間で温かい交流会が開かれました。



メーラプラザ（深沢）



東柏原コミュニティ



一ツ家コミュニティ

生徒は総合的な学習の時間を利用して住民との交流を行いました。

住民も、孫と同じ位の年代の生徒に「どこの家の子だね？」と積極的に声を掛けていました。

中学３年生は、今年度町づくりのためにとふるさと納税返礼品のプロデュースを企画しています。飯綱町のりんごについての学習を１年生から継続しており、いきいきサロンも住民の声が直接聞ける機会として、「飯綱町の魅力はなんですか」とか「飯綱町のこどもたちに期待することはなんですか」など質問していました。地域の方も「自然が一番だね。お金を出して出かけなくても、もともときれいな花が見られる場所に住んでいるからね。」「生徒の皆さんには、是非飯綱町に戻ってあとを継いでもらいたい。」と率直な思いを伝えていました。

記念写真を撮るなど温かで楽しい雰囲気の一時でした。中学生と住民がコミュニケーションする機会はなかなかないので貴重な時間になりました。